

名古屋市立大学薬学部の製剤学実習における味覚センサー導入の試み～第3報～  
○竹内 堂朗<sup>1</sup>, 田上 辰秋<sup>1</sup>, 瀧 萌子<sup>1</sup>, 柳井 浩志<sup>1</sup>, 豊田 健太郎<sup>2</sup>, 池崎 秀和<sup>2</sup>,  
尾関 哲也<sup>1</sup>(<sup>1</sup>名市大院薬, <sup>2</sup>インテリジェントセンサーテクノロジー)

名古屋市立大学薬学部の製剤学実習では、2011年度に全国の薬学部に先駆けて味覚センサーの導入を行い、これまで継続して学生実習を行ってきたのでその実施内容について報告を行う。味覚センサー導入の背景として、味覚センサーがすでに多くの製薬企業に導入されており、医薬品開発における薬物の苦味マスキング効果を客観的に評価する方法として広く普及していることが挙げられる。学部時代に、実際に製薬企業で使用されている味覚センサーに触れておくことは、学生にとって貴重な経験になると考えた。本実習項目の導入講義では、味覚センサーが薬学分野に応用されている背景について説明した。特に、小児の服薬ノンコンプライアンスを防ぐために、苦心して苦味マスキングを行っている医療現場の話などを交え、学生が興味を持つような講義内容を心掛けた。その一方で医薬品だけでなく食品を含めた味覚全般の話をするにより、学生に味覚そのものについて興味を持ってもらうようにも心掛けた。

また、味覚センサーの実習内容と組み合わせ、苦味マスキング技術が医薬品開発において重要な技術である、口腔内崩壊錠の製造を実習項目に組み込んでいく。口腔内崩壊錠を製造するための専用の杵・臼治具と油圧プレスを用いて、実際に錠剤を作成し、その後、製剤評価として、崩壊試験と硬度試験を行った。崩壊試験器には、口腔内崩壊錠専用のものを用い、ヒトの口腔で錠剤を崩壊させる時間とどれだけ相関が取れているかどうかの検討を行っている。

実習の最後には、アンケート調査を行い、実習の理解度と満足度、改善点などのフィードバックを行った。今年度も2011年度、2012年度同様、実習に対する高い理解度と満足度を得ることに成功した。